

乳房

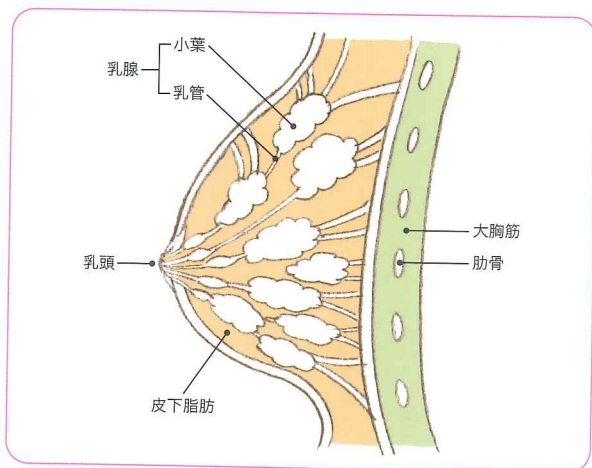
乳がんが増加傾向。

早期発見のためにも検診を！

一般に、がんは早期のうちには自覚症状に乏しく発見が遅れがち。けれど、セルフチェックで早期に発見できるのが乳がんです。気になる症状がある場合は、乳腺科を受診しましょう。定期的な乳がん検診も忘れずに。

乳房のしくみ

乳頭から放射状に乳腺がひろがり、周りを皮下脂肪が包んでいる。乳腺は乳管や小葉で構成されており、乳がんの多くがこの部分で発生する。



〔監修〕

福田 護 先生

聖マリアンナ医科大学附属研究所

プレスト&イメージング先端医療センター附属クリニック院長(乳腺外科)

いまや早期発見をすれば怖くない病気

乳がん

にゅうがん

乳がんの進行

0期 乳がんが微小で、転移せず乳管の中にとどまっている状態(非浸潤がん)。完治も十分可能。

I期 がん細胞のしこりが2cm以下で、わきの下にあるリンパ節には転移していない状態。

II期 がん細胞がリンパ節に転移した状態。大きさがIIA期とIIB期に分類される。(2~5cmでリンパ節転移がない状態もIIA期に含まれる)

III期 症状がII期よりさらに進行した状態。症状によりIIIA~IIIC期に分類される。

IV期 がん細胞が血液の流れにのり、骨や肺、肝臓などへ遠隔転移した状態。

治療

乳がんは「見つかりやすく治りやすいがん」。基本はがん細胞の切除で、手術後は5~10年かけて再発予防の治療と検査。

手術 がん細胞を切除して取り除く。できる限り乳房を残す温存手術もある。

放射線治療 温存手術後の乳房内に残っているかもしれない微小ながん細胞を死滅させるために、放射線を照射。がんの再発を防ぐ。

抗がん剤治療 抗がん剤を使ってがん細胞を攻撃。病巣が大きい場合は、抗がん剤で小さくしてから切除手術をすることも。

ホルモン療法 飲み薬や注射で女性ホルモンの分泌や働きを抑制し、がん細胞の発生や増殖を抑える。手術後5~10年単位で継続。

乳がんはこんな病気

乳腺内の乳管や小葉に発生。乳管や小葉にがん細胞がとどまっているものを「非浸潤がん」、乳管や小葉を包む基底膜を破ってがん細胞が外に出ているものを「浸潤がん」と呼ぶ。

症状

乳房内に硬いしこりができ、ある程度の大きさになれば外から触っても分かるように。押しても痛みはない。乳輪のただれや乳首からの出血、乳房のへこみなどの症状で見つかることも。

こんな人は要注意

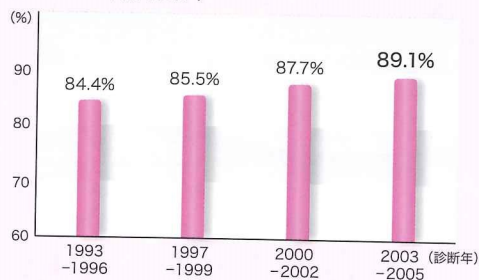
女性ホルモン依存型の乳がんは、初潮が早い、出産歴・授乳歴がない(もしくは初産が遅い)人はリスクが高いとされる。祖母・母親・姉妹などの女性親族に乳がん経験者がいる人は遺伝的要因が強い。その他に、飲酒・喫煙の習慣がある人、肥満傾向の人、運動不足の人も要注意。

*1 厚生労働省「平成26年患者調査」より
*2 公益財団法人 がん研究振興財団「がんの統計」¹⁴

日本人女性がかかるがんの第一位^{*1}を占める乳がん。今では年間に約8万人が新たに乳がんと診断され、1万3千人を超える方が亡くなっている。罹患者は40代で急増するが、20~30代の若い世代にもみられるので油断はできない。0期では手術だけで済むことがほとんどだが、I期以上の早期がんは、手術後も再発予防のための治療や検査が必要となる。

いまや日本人女性の12人^{*2}にひとりが生涯の間にかかる可能性があるとも言われているが、発見方法や治療技術の進化により、早期に発見して治療できれば怖い病気ではなくなってきた。

● 乳がんの5年相対生存率^{*3}



● 乳がんの罹患者数・死亡者数



【乳がんの罹患者数・死亡者数】 国立がん研究センターがん対策情報センター

【乳がんの5年相対生存率】 全国がん罹患モニタリング集計 2003-2005年生存率報告(国立がん研究センターがん対策情報センター, 2013)

国立がん研究センターがん研究開発費「地域がん登録精度向上と活用に関する研究」平成22年度報告書

*3 乳がんなど一部のがんで注目すべきは、一般的な5年生存率(治療開始から5年後に生存している患者の割合)ではなく10年生存率といわれています。